石段の上

野狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

石段の上

【Ｎコード】

Ｎ６３０２Ｖ

【作者名】

野狐

【あらすじ】

高校の同窓会に参加するため田舎へ帰郷した四至本修史。彼は幼馴染のトオヤの運転で彼の愛車を走らせていた。久しぶりの親友との他愛のない会話。その最中でふと見慣れない石段を見つけて・・・これは一体何なんだ？現実が崩壊し、非現実が形を成してゆく。自らを守れるものは自分自身。均衡の崩れた世界に、知らず知らずに足を踏み入れた二人を襲い蝕む恐怖を描いた作品。

その一

四至本修史（ししもと しゅうし）

その名前の全ての文字に不吉を意味する「し」という文字が入るが、彼はそれを不吉だなどと思ってはいない。それどころか四至本という珍しい苗字は嫌いではなかったし、“シュウジ”ではなく“シュウシ”なのは他とは少し違う感じで気に入っていた。

なぜ自分の名前は、こんなに「死」に付きまとわれているのか？彼は過去に一度、自分にこんな名前を付けた父親にそう聞いたことがあるが（名付けたのは父親だった）、父親は吐き気がするような強い酒をチビチビと啜りながら頬を赤らめて上機嫌に答えた。

「死だって？馬鹿を言えよ。お前に付きまとってるのは幸福だろう？お前の名前は“しあわせ”なんだぞ」

くだらない冗談に修史は心安らぎ、全ての疑問が吹っ飛び、それ以来自分の名前はなんて幸せなんだろう、とそう思うようになった。交通事故に、それも過失なしの一方的な事故に三度あったが、彼はほぼ無傷で助かったし、小学生のとき、それまでの友人たちに泣く泣くさよならを告げて田舎へと転校して行ったおかげで、それから三十を迎える今年までずっと親友であり続ける男、平岡トオヤと出会えることが出来たのだ。彼の誕生日は十月八日。だからトオ、ヤ。彼はそんな理由もあって修史の名前をよく羨ましがった。

トオヤの家はこの田舎町に古くからある家で、彼の祖母は地元ではちょっとした有名人だった。良い噂、悪い噂、両方含めての話だが、少なくとも修史もトオヤもお婆さんのことを好いていたし、悪い噂にあるような、例えばお婆さんが古い儀式を行っている、というようなものは、子供たちにとってはむしろお婆さんに興味を持つ

理由のひとつに過ぎなかった。
「お婆さんに弟子入りする」
ほとんど真剣な表情で言うのを、修史は「頑張れよ！」とよく茶化したものだった。
人が何を信じて何を信じないか、それはそれぞれ個人の自由だ。それは自分の名前なのか、お婆さんの古い儀式なのか・・・ただ言えることは、それを心から信じていなければならないということ。何故ならそれらはそのほとんどが単なる思い込みなのだから。

「何でまたこんな時期に同窓会をやろうって・・・誰が決めたんだよなぁ？」助手席の修史は走る自動車の窓から外を眺めてぼんやりと言った。
よく晴れた日で風も穏やかだった。十一月に入り、少しずつ葉を落とし始めているものの、紅葉に萌える木々は鮮やかで美しかった。落葉が道路を薄っすらと埋めて車の轍が出来ている。少しだけ傾いた太陽の、その黄色味を帯びた陽光が落葉に反射して、赤黄色をより鮮明に染め上げている。十一月の冬の訪れを思わせる霞がかった日の光だ。
「塚原だよ」自動車を運転しているトオヤが不意に言った。「塚原吉成、覚えてるだろ？あいつが呼びかけたんだ。政府が祝日を勝手に動かして決めたシルバーウィーク。年末はどいつも忙しくなるだろうし、おあつらえ向きじゃないかって。それより修史よ、いつまでこっちにいられるんだ？仕事、よく休み取れたな」
修史はトオヤを横目で見て少しだけ笑った。それから窓枠に肘を乗せて再び外を眺めた。
「まあな、有休も使ってな。おかげさまで年末年始は・・・多分帰ってこられないだろうな。でもいいや、みんなに会うのは久しぶりだし・・・みんな来るんだろ？」
トオヤは前方を見たままでうなずいた。

「平田とケンジ以外は大抵来るみたいだな。あいつらは仕事だって。どいつもこいつも地元に戻ってきてるよ」
「お前もだけどな」修史はそっと付け足した。
「あぁ、その通りだ」トオヤは小さな声でポツリと答えた。
二人の乗る五十二年のフォルクスワーゲンは地面の凹凸に対して正直な揺れを二人に伝えながら走った。彼らは川向こうの市道を進んでいた。決して大きな道ではないが信号がなく、地元の人間のみが知る、言わば秘密の抜け道みたいなものだ。
「ってか、お前まだこの車乗ってるんだな」修史は言って、その堅い黄土色のシートを楽しむように座りなおす。指で触れると冷たく、幅も狭い。「これって確かおじさんの？」
トオヤは表情を変えず、ちらりと修史を見やる。トオヤは昔からこの表情をする。無表情なのだが、それは自分は間違っていないという意志の表れでもある。つまりトオヤはこの古い、グリーンのワーゲンに乗っていることに自信を持っている・・・ということだ。
「古いな、確かに古い」トオヤは言った。「けどまだ走る。親父にもらったやつだけど・・・ずっとコイツに乗っていたらもう降りられないな。安全だぜ、実際に。俺が保障するさ。とにかく俺はコイツが走らなくなるまではコイツでいくつもりだな」
「そうか」修史はうなずいた。
「お前は？」
「俺？」言って修史は少しだけ自慢げにはにかんだ。「この間買ってよ、車。日産のセレナ、来週納車するんだ。オーロラムーヴって色・・・まぁ紫色よ」
修史は期待していたが、トオヤは微塵も笑わなかった。それどころか表情は変わらず、それはむしろ蔑んでいるようにさえ見える。
「セレナって、そんなでかい車でどうするんだ？それに紫って・・・相変わらず趣味が悪いなお前は」
そんなトオヤの冷たい視線を睨むようにして見返した修史は、コブシを軽く握ってトオヤの肩を軽く小突いた。

「うるせぇよ。いずれ結婚するんだよ俺は。そうなったときの為に必要だろうが」修史は言った。「俺たちは今年もう三十だぜ？あっという間よ。そろそろだって、そうだろう？」

「そうかそうか。そうだろうな」言ってトオヤは笑った。

修史もまたトオヤの顔を見て笑った。

エアコンもない。オーディオもない。ラジオはここでは砂嵐専門チャンネル。窓は手動。四速のミッション。もちろんナビもない。そんなフォルクスワーゲンの中は沈黙した。二人とも喋らず、トオヤは運転して、修史は肩肘付いて外を眺めているばかり。しかしながらそれでよかった。昔から・・・こんなものだ。

他に走る車もない。人も歩いていない。時おり駆け抜ける風が落ち葉を散らかして、そして再びしんと止む。暖かい日だったが少しだけ寒い。少しだけ眠たい。修史はほとんど夢想にふけりながら様々に思い描いた。長い間会っていない旧友たちの変わった姿。あの子は可愛かったなぁ。結婚して子供が生まれたと聞いたけど、太っておばさんになってたりはしないか。それに、それに・・・

その時だった。

「止めろ！」

突然修史は声を上げた。驚いたトオヤは急ブレーキを踏んだが、ワーゲンは散らばった落ち葉に足を取られて横滑りした。必死で立て直すトオヤと、シートベルトにしがみつく修史。彼らを乗せた安全性が保障されたワーゲンは道路に垂直の姿勢のまま落葉の絨毯の上を数メートル流された後でようやく止まった。エンストを起こしてエンジンが止まり、車内にカン、カーン、カン、と小さく金属を打つ音が響く。二人は前を向いたまま硬いシートに背中を押し付けて息を呑んだ。

強く冷たい風が吹き抜け、フォルクスワーゲンが乱した落葉の道を掃除して過ぎ去った。

「びっくりした・・・」トオヤは深く息を吐いた。「あぶなかった・・・」

トオヤは前方と後方に他に車がいないのを確認すると安心して、シートに体を預けたままで体中の力を抜いた。
「で、いきなりどうしたんだ？」
修史は首を振った。修史自身もどうしてそんなに大声を上げたのかは理解できなかった。ただ彼の視線を奪ったもの、それは彼自身分かっていた。それは石段だった。不意に目に飛び込んできたもの。その石段。彼はゆっくり息を吐いて思った。あれが大声を上げさせた原因、きっとそうだ。間違いない。
「石段があった」ようやく修史は口を開いた。「木と木の間に石段があったんだ」
「石段？」体を起こし、怪訝そうにトオヤが聞き返す。
修史はトオヤを見やった。「あぁ、石段があった。あんなところにあったか？ここは昔から通る道だろ？・・・戻ってみないか？」
その申し出にトオヤは考えながらも、結局は彼の好奇心が沸きたてられたようで喜んで引き受けて、フォルクスワーゲンは元の道を引き返して行った。

その二

道路脇にワーゲンを停車させ、二人はそれの前に立っていた。確かに目の前には石段があり、それは修史の見間違いではなかったのだ。それだけ急ではなかったが石段は長く、上へと続いていて、その向こう側を見ることは出来ない。周りを木々に囲まれているせいで少し薄暗い。二人は石段を見上げた。そして二人共に奇妙な感覚を味わっていた。それは恐怖ではなく、重くて不思議な感じだ。言葉に出来ない、見えないものがその空間に充満しているような感覚。きっと屋久島とかに行ったら同じような気持ちになるんだろうな、と修史は思った。

「知ってたか？この石段のこと」修史は言った。

「いや」すぐにトオヤは答える。「知らなかった・・・というよりも、確かにこんな場所にこんなものはなかった」

トオヤは表情を微塵も変えない。それはトオヤの自信の表れ。修史はそれを見過ごさず、ならばトオヤも自分もやはりこの石段を知らないのだと確信した。

「最近出来たのかな？」

「違うな。古過ぎるだろ、どう見ても」言ってトオヤは身を乗り出して石段をしげしげと見つめる。「でもちゃんと掃除はされているみたいだな。落ち葉もほとんどなくて・・・どうする？上まで上がってみるか？」

そう言って振り向いたトオヤの涼しい顔に対して修史の表情は曇っていた。

「ここをか？別にいいけど・・・どこに繋がるんだ？一体、これって」

「さぁな、でも気にならないことは、ないよな」
「車は？いいのか？ここに置いといても」
トオヤは元来た道と、さらに道の先を交互に眺めて言った。「大丈夫だろ、今は車も来ないし」
「・・・そうだな」修史も同じように道を見て答えた。

十三、十四・・・
二人は石段を登っていった。前をトオヤが歩いて、その半歩後ろを修史が歩いて上ってゆく。
三十八、三十九、四十・・・
長い石段は暗く、古いものだった。木々がその枝葉をアーチ状に伸ばして石段を覆っている。しかし空を見上げると枝葉の隙間から僅かに光が注ぎ込んでいて、修史は目を逸らした。
五十一、五十二・・・
半分ぐらい登っただろうか。見上げればまだまだ石段は続く。
六十四、六十五・・・
周囲の木は密集していて、その先を見透かせない。まるで生い茂った林の中に、それを裂き割るようにしてこの石段が出来た。そんな風にも見える。どこかで野鳥が鳴いている。見えない何かが低いところをガサガサと音を立てて走り去ってゆく。頭の中ではビートルズの“Ｒｕｎ　ｆｏｒ　Ｙｏｕｒ　Ｌｉｆｅ”が流れている。自分を取り囲む周りの景色とは不釣合いなその軽快なメロディーは不安な修史の足を石段の上へと持ち上げた。
九十九、百・・・
頂上が見えた。もうすぐだ。
百六、百七、百八・・・
先を歩いていたトオヤに続いて修史もまた石段を登りきった。石段は数え間違いでないならば全部で百八段あった。その数字は人の煩悩の数と同じなのだが、それは偶然だろうか。修史は思いながら

背筋を伸ばして見渡した。
　石段の上の景色、そこはちょっとした広場になっていて、周りを木々が丸く囲んでいた。中央を石畳が一直線に進み、石畳に沿って灯篭が立っている。その他は砂地で白く反射している。そしてその先には小さな社が一つ立っていた。清浄な場所で神聖ささえ感じられる。そこに人の姿や気配は感じられないが、石段同様誰かが手入れをしているらしく、綺麗に掃除がされている。
「古いけど、味がある場所だな」トオヤはポツリとひとりごちた。
　二人は中央の石畳を奥へと歩いていき、社の前まで進んだ。神社というには小さいような気もするが、感じられるひどく霊妙な気配は二人の視線をしばらくの間釘付けにした。目の前に立って社を見上げ、垂れ下がった麻の鈴緒を手に引くと、鈴緒の先の二つの鈴が鈍く鳴り響き、彼らの思いはますます強くなった。
　トオヤはひょいと賽銭箱を越えて社の木組みの格子から中をのぞき込んだ。中は暗くほとんど何も見えない。しかしながら奥に台座が置かれ、その上に何やら文字か記号が書かれた紙が張られているのが見えた。修史は黙ってそれを見ていた。
「何かあったか？」と修史。
　トオヤは首を振っただけで何も言わなかった。トオヤは社の周りを観察しながらまじまじと見やり、修史は彼のことを待つように社から少し離れて見守る。空を見上げると真っ青と真っ白が入り混じっている。少しだけ太陽が傾いてきているようだ。空の高い所を黒い鳥が過ぎ去る。同窓会は十八時からだったかな。場所はどこだった？トオヤが知ってるか。
「おい、修史！」トオヤが声を上げた。見ると社の横を指差している。「こっちに裏に行ける道があるぞ！ちょっと行こうぜ！」
　修史は嫌々ながら手を上げて、苦笑いしながら彼の元へ向かった。修史はトオヤが一度興味を持ち出したら自分でそうするまでは止めない、ということを知っているのだ。ここで断ったとしても無理だろう。無理矢理連れて行こうとするのが彼だ。

中学二年の夏休みのこと、獅子座流星群がやってくるということでトオヤも修史も期待していたが、生憎彼らの町は曇り空で星を見ることは叶いそうにもなかった。そして修史は諦めていたのだが、トオヤは全く諦めがつかなかったらしく、トオヤは修史を誘って他県まで獅子座流星群見学ツアーを敢行したのだった。もちろん互いの両親には本当のことは言わず、川原でキャンプ、という名目だったが、実際には修史はこれを実行するなどとは思ってもおらず、トオヤが自分を無理矢理にでも引っ張って実行したことに彼は感服した。そのときトオヤはこう言った。

「どうだ？来てよかっただろ？」

合流した彼らは社の横の道を進んで行く。建物の端から顔を出すと、社の背後は神聖な面構えとは裏腹にひどく邪悪に見えた。修史は身震いした。しかし彼らは道を進んで行った。今度は修史が前を歩く。冷たい風が音もなくゆっくりと漂っていて、それが首筋を通過するたびに修史は襟首を結んだ。

社の裏には特に何もなくただ林が広がっていて、杉の木がまばらに立っていた。しかしそれのどれもが太く高く、年代を感じさせるものばかりだった。二人は林に少しだけ踏み入った。鼻頭を苔生した青臭い臭いがかすめ、修史は一瞬顔をしかめた。暗い林の中。僅かな日の光は地面にまでは届いてはいないだろうか。湿った落ち葉と土の柔らかい感触。その隙間で暮らす小さな羽虫や小虫たち。冬を待ち、何もかもがただただ静まり返っているかのようだった。

鳴き止んでいた野鳥がどこかで再び鳴き始めた。

しかし見渡してもその姿はなかった。

「何もないな」修史はため息混じりに言いながら脇の杉に手をついた。「でもこんな場所があったなんて、驚きだよな。全然知らなかった。後で同窓会の話のネタになるかな、これは・・・でもこれだけだな。何もない」

「いや・・・」トオヤは響くような低い声で答えた。「修史、こっちへこいよ、ゆっくり」

なんて声で呼ぶんだ？
修史は振り返って怪訝な目でトオヤを見た。
するとトオヤの視線が上向いている。自分の方ではなくて、その上を見上げているのだ。不思議に思った修史は、どうした？と思いながらもそれを口には出さず、トオヤの視線をふと辿ってみた。
そして辿り着いたその先、その光景を見て、修史は驚きのあまり目を見開いた。杉の木から手を離すとゆっくりと後退し、終には尻餅をついてしまった。尻に冷たい感触をじわりと感じたが、修史はその光景から視線を逸らせなかった。
彼が見たもの、そこには周りのありとあらゆる杉の木の幹に藁人形が貼り付けになっていたのだ。針金で巻きつけられたり五寸釘で打ち付けられ、中にはその胸を鈍く錆びた鎌で貫かれているものさえあった。その数は百や二百どころの騒ぎではなかった。
千か、それとも一万か・・・見渡す限りの木の幹に藁人形が打ち付けられている。
「なんだって言うんだ・・・これは・・・この藁人形・・・」
修史は言いながら自分の心臓がどんどん早く脈打つのを感じた。恐ろしさよりも、その光景に圧倒されて、どういう風に感情を持っていったらよいのかが全く分からない。ただただ視線を上下左右させて藁人形の哀れな姿を見ることしか彼には出来ない。
「修史、さぁ立て・・・やばそうだぞ、ここは・・・行こう」
トオヤは言いながら修史に近づいて手を貸した。修史は手を借りて立ち上がり、トオヤの意見に同意する。そして二人がその場を立ち去ろうとしたまさにその時・・・二人お互いに顔を見合わせて互いの意思を汲み取った。

その三

「トオヤ・・・分かるか？」修史は小さく言った。今にも裏がえりそうな声。震え、怯え、弱々しい。

トオヤは真剣な面持ちでうなずいた。「分かってる。感じたんだな・・・俺たちは今、誰かに見張られてる・・・そうだな？」

修史はうなずいた。

「俺の後ろの方だと思う・・・見えるか？」

「いや」トオヤは修史の肩を透かして林の奥を探った。「分からない・・・何も見えない・・・けど何かがいる」

二人はその場を動かずに成り行きを待った。しんとした空間の中に冷たく重い空気が停滞している。風も吹かない林の中で自分たちは何に見張られているのだろうか、とそう思いながら、精神を研ぎ澄まして辺りに気を張りながら離れる術を考える。すると二人の耳に小さな音が聞こえた。

ギシ・・・ギシ・・・

それは林の中、地面に落ちた枝葉を何かが踏み締める、そんな音に二人には聞こえた。

ギシ・・・ギシ・・・

音はなおも二人の耳に入った。見えない何かの視線はいまだに感じ取ることが出来る。そして音は確実に聞こえる。修史は今にも気を失いそうだった。心臓が競り上がり、喉から飛び出してきてしまいそうだ。絶え間ない短い呼吸が唇から出たり入ったりして、自分の意思では制御できない。体中を実体のない手がなぞり、悪寒が電気信号となって体中を駆け巡った。

ギシ、ギシ、ギシ・・・

音は間隔を狭めて二人に近づいた。修史はもうどうしてよいのか分からなかった。そしてトオヤを見た。するとトオヤは冷静な面持ちで真っ直ぐを見据え、何やらぶつぶつと言っている。鼻腔を大きく開き、熱い息がそこから漏れている。修史は体を寄せてトオヤの言葉を聞いた。

「野良猫の尾の数、ぶれ動く太陽、落下点の輝き、狐目の男、東に上る守護者の魂、白鷺の信仰心、川のせせらぎ川の濁流、狐目の男、命あるものの末路、ぶれ動く太陽・・・」

修史は慌ててトオヤの腕を取った。修史はトオヤがおかしくなったと思ったのだ。彼は腕をきつく掴み上げた。するとトオヤは顔を歪めて腕を振り解いた。

「何をするんだ、急いでいるのに!」

修史は頭を振った。

「何って・・・早くここから離れないと・・・」

ギシ、ギシ、ギシ、ギシ・・・

「はっ・・・急いで、逃げないと」

「大丈夫だ!修史、大丈夫、お婆ちゃんに昔聞いた魔よけの呪文だ。どれもこれも、言葉一つ一つに意味がある。この中のどれかなんだ・・・狐目の男、東に上る守護者の魂、白鷺の信仰心、川のせせらぎ川の濁流、狐目の男、命あるものの末路、野良猫の尾の数、二つの角の向こう側、四門の精霊・・・どれだ?どれだ・・・」

ギシ、ギシ、ギシ、ギシ・・・

恐ろしい目が自分たちを見つめている光景が二人の脳裏に突如映りこんだ。二人は体を硬直させて顔を上げる。意思の感じない二つの目。白と黒だけで他に色はなく、血を感じず、爬虫類のそれのようにぎょろりと見つめてくる。

風が強く吹きだして林が俄かに騒ぎ始める。藁人形たちが騒ぎ出し、そのざわめきは彼らの自由への嘆きとも、打ち付けられたことへの憎しみとも取れる。

トオヤは平静を保ちながらも、もうすでに限界は近かった。思い

通りに魔よけの呪文の言葉が出てこず、口は乾燥し始め、どろりとした粘性の汗が額に浮き出し始めた。トオヤは食いしばった。くそう、どうすることも出来ないのか？そんな馬鹿なことが・・・

「白鷺の信仰心だ・・・」不意に修史が言った。

驚いてトオヤが修史を見る。

「白鷺の信仰心だよ、呪文・・・幸せな呪文なんだ！俺と同じなんだ、きっと・・・」

ギシギシギシギシギシギシギシギシギシ・・・ザッザッザッザ・・・

実体のない音はすでに二人のすぐそばまで近づいてきている。修史はトオヤを真っ直ぐに、瞬きもせずに見つめた。修史の動かない体は小刻みに震えてこれ以上は何も喋られなさそうだった。

ザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザ・・・

トオヤは眉を寄せて、息を吐き、目を閉じて、ゆっくりと息を吸った。そして無表情を作り出し、見えない何かに向かって叫んだ。

「白鷺の信仰心！」

その瞬間、どこかで不気味な呻き声が上がるのを二人は聞いた。若い女のような、獣のような、悔しそうな呻き。そして突然足音が止んだ・・・

二人は見合わせてすぐに、何も言わないままに走り出した。一心不乱に石段へ向かって走る。二人は確かに聞いた。再び鳴り出した足音を。

ザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザ・・・

それは怒りに満ち溢れていて、二人を必死に追いかけてくる。しかし二人は振り返ることもなく走り抜け、石段を飛ぶように駆け下りた。あわや転げ落ちそうにもなったが、それもお構いなしに百八段を走った。

ダン！ダン！ダン！ダン！

左右を囲む美しい紅葉が次から次へと背後へ飛び去り、心音と風の音だけが耳に響いた。

ダン！ダン！ダン！ダン！

二人はようやく石段の一番下まで駆け下り、フォルクスワーゲンに飛び乗った。追ってくるものは分からない。ただ近づいている。それだけを感じ取ることが出来る。修史は目を閉じたままシートベルトを握り締めた。トオヤは口をつぐんで慣れた手つきでギアを操作し、金切り音を上げながらフォルクスワーゲンを発進させた。

「どうして“白鷺の信仰心”だって思ったんだ？」とトオヤ。

町の中へ入ってしばらくした後、二人はやっとのことで平静を取り戻していた。まだ四時半だがすっかり暗くなって、商店や街灯が変わりに町の灯りを取っている。赤信号で停車すると灯りは車の中まで射し込んで二人の視界を赤く染めた。方向指示器のいかにも機械的な音を耳に修史は安堵感に包まれていた。

「だって“白鷺の信仰心”には“しらさぎ”“しんこう”“しん”って“し”が三つもある。これは“しあわせ”だって、そう思ったんだ」

トオヤは呆れた表情で苦笑しながらも、最後には納得して見せた。

「なるほどな。よく分かったよ」

信号が青に変わり、フォルクスワーゲンは同窓会の開かれる場所へ向かって町の中を走って行った。

「でもよ、あれはなんだったんだろうな」修史は落ち着いた声で言った。

「うん、あれ・・・」トオヤは何かを言おうとして思い止まり、口をつぐんだ。そしてしばらく考えた後、軽い調子で言い放った。

「さぁ、考えても分からないな。でも、夢ってことにすれば、夢に過ぎないんじゃね？」

二人は視線を合わせると、声を上げて笑った。

その三（後書き）

「石段の上」完結です。
この物語は『夏のホラー２０１１　～夏の夜には怪談を～』参加用に書き上げました。
別の世界への入り口は、案外見慣れた場所にあって、私たちは知らず知らずに通り過ぎているのかもしれませんね。
視線の正体は書きませんでした。
お化けや怪物が目の前に現れるよりも、得体の知れない目に見えないものの方が怖い、なんて思いませんか？私は目に見えないと怖いです。
感想を聞かせてもらえたら嬉しいな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6302v/

石段の上

2011年8月9日03時18分発行